

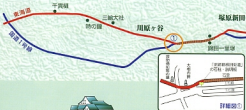
箱根旧街道 西坂

国指定史跡



箱根旧街道

箱根旧街道は江戸時代初期、徳川幕府が整備した東海道の一部で、標高約25mの三嶋宿から標高約815mの箱根峠を登り、標高約10mの小田原宿まで下る8里（約32km）の坂道である。この坂道は「箱根の山は天下の険」と家にも歌われたように、東海道第一の難所といわれ、このうち、三嶋宿から箱根峠を越え、箱根の開所までの区間を西坂ともいう。当初、この箱根旧街道には峠を止めのために竹が敷かれていたが、寛永八年（1680）、三嶋峠（約3km）で石が敷きつめられ、石敷き（石巻）の道となった。



また当時の街道には、距離の目安となる一里塚が道の両側に築かれた。箱根田街道西坂にも、山中、菅原、三ツ谷の3ヶ所に一里塚が築かれ、このうちの御田一里塚は、大正11年3月8日、国史跡に指定されている。そして平成16年10月18日、あらためて、3ヶ所の一里塚を含む石段区間を中心に、西坂・東坂で計8.0kmの国史跡に追加指定された。



国史文史跡
箱根田街道 西坂

発祥年月日 平成16年10月18日
 編成・発行 三島市教育委員会 文化振興課
 TEL 056-992-2872 FAX 056-972-3304
 E-mail burakidochi.miyama.shizuoka.jp
 印刷 有限会社昇1印刷

凡	景
実地1km	———
距離目安	———
石段区間	———
石段区間	———
一里塚	———
一里塚	———

三嶋宿～市の山新田



東海道五十三次之内 三島「朝霧」 三島市郷土資料館蔵



東海道五十三次之内 三嶋 新町番から三嶋迄のそのむ 三島市郷土資料館蔵



穴地蔵

市の山新田の西側にあり、六体の地蔵が前列と後列の二列に並ぶ。三界方霊の鎮にも一体あるため、計十三体の地蔵が祀られ、後列右端の一体には、寛政6年（1794）と刻まれている。住民に信仰されているお地蔵様らしく、千作りの帽子をかぶっている。



三嶋大社

三嶋大社は伊豆國の一宮として、伊豆に復興となった醍醐朝などの有力武将や伊豆天辺の人々、奥州派の戦人に古くより信仰され、今も多くの参拝者を集める。



時の鐘

三嶋大社の三ツ石神社境内にあり、江戸時代には屏風の写を彫らせていた。石鐘の三嶋目は、奥端は新町番、西端はこの三石路に出口があり、西端の東西長は約3.8mであったが、三嶋番が寛永年について東西に拡大した。江戸時代末には、北小幡からさらに西方の伊豆・駿河間の国境にある千幡まで増城が拡大し、東西長は約23mとなった。



松並木と鶴田一里塚

慶長9年（1604）、徳川幕府は諸国の街道を整備してその保護に松を植え、約4cm毎に一里塚を築いた。三島市では、鶴田の集り口の約10km区間において、約40本の松並木と鶴田一里塚が残っており、江戸時代の遺がしのばれる。平成16年、この松並木区間は、文化11年（1920）に指定されている鶴田一里塚を含め、あらためて国史跡に追加指定された。



笹原新田～箱根峠



山中城跡 (江户幕府)

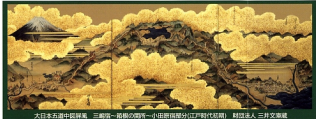
小田原城の北東氏が築いた山中城で、天正18年(1590)金谷氏一族が移住するまで、元和9年、国史館に指定され、三島峠では関原合戦の跡をもとに史跡公園として整備した。陣子塚、旗塚などに移葬が見られる。

観知らず地藏 (江户幕府)

駒蓮山の土手にある。箱根峠で平定した数人に御褒め状が与えられ、霊地が舟倉と目かくらみ旅人を救ってしまふ。しかし旅人は御褒め状をうけたあつたといふ不幸な親子の寄り合いをせういたんで建てられた。



東海道五十三次之内 箱根 峠の境水 箱根町立郷土資料館蔵



大日本石道中間碑 三島宮～箱根の関所～小田原側部分(江戸時代初期) 財団法人 三井文庫蔵



ハンズ地藏

六六の手をもつ長脚僧の像である。江戸時代の頃は、旅人や荷物運搬には欠かせぬ石像で、火災なども、旅人の安全を願って建てられた。



国道箱根坂跡改築記念碑

箱根峠は標高440m。伊豆と相模の国境である。境本は記念碑に建てられたといわれるが、大正12年の国道工事に 의해消失した。



富士見平と芭蕉の句碑

この地は富士山を見る絶好の地である。しかし毎年八月朔は、しばしば濃霧が立ち込め、して見えない。その霧が見えない日がある。天享元年(1680年)松尾芭蕉は、芭蕉の句碑、(寂しくて 富士を見ぬ日ぞ 白自雲)と旅人だ。



芝切地藏尊

山中城跡に隣接する。このお堂の境内に、切り取った土を高く積み上げて、子孫の繁栄が、健康になると言われて建てられた。



宗助徳利の墓

山中新田集落の裏山、一本杉の影下にある。古と徳利が埋まっていることから徳利の墓と呼ばれる。

接待茶屋跡

山中一帯は田舎を流れて向一側にある接待茶屋は江戸時代、旅の客を待たせる人や旅の客を待たせるために、茶屋や長き火、刺突を施したことで、明治40年まで続けられた。

